

寸言

新明和工業株式会社
取締役・常務執行役員・
航空機事業部長
兼飛行艇民転推進室長
石丸 寛二



民転元年

新年、明けましておめでとうございます。

インド国からの「US-2i」（US-2型救難飛行艇の民間転用機名称でiはInternational）引合いに対し、弊社は日本政府のご指導の下、本邦初の防衛省開発航空機の輸出に向けた活動を官民一体で取り組んでおり、本年はまさに「民転元年、インド元年」であります。

民間転用機の輸出候補先インドは、次の大きな特徴と可能性を秘める大国です。

まず、世界最大の民主主義国家で経済成長著しく、航空機ビジネスの有望市場です。公表データによれば、インド軍は2027年までに約1,000機の戦闘機、1,400機のヘリコプター及び250機の輸送機等の配備を計画しており、約2,500億米ドルの潜在市場と云われます。民間需要についても航空貨物輸送量は次の10年間で6倍に増大、ビジネス・ジェット機市場は過去10年で8倍に増大し、今後5年間で150～170機の需要が予測されています。

2013年12月1日インドの宇宙探測機「マンガルヤーン」は、地球軌道からの離脱に成功して火星まで10ヵ月の惑星間航行を開始しましたが、そのコストはわずか8,000万米ドルでした。インドには「ジュガード（Jugaad）」と呼ばれる「限られた資源を創意工夫で活かす精神」が根付いている為、低コスト・プロジェクトが実現出来たと云われます。

華々しい宇宙開発プロジェクトの陰で、高品質な航空機用部品を生産・納入出来る会社がインドには極めて少ないのも事実です。インド航空機市場参入の懸念点は、第1に複雑な税制・規制とコンプライアンス、第2に契約額に対するオフセット（相殺取引）要求、第3に国外企業によるインド企業への投資抑

制（海外直接投資率26パーセント）です。インド軍向け案件では、応札から契約締結まで長期に及ぶこともあり、更に固定価格契約でなければならず、価格変動リスクも小さくありません。

ほぼ毎月インドへ出張する小職は、日印の根源的価値観は「類似」ではなく「似て非なるもの」と確信しました。日本人は「社会・共同体」の価値観を優先しますが、インド人はヒンドゥ教の教えから「個人善（自己の欲望制御、平和・非暴力主義）」を優先し、その結果が「社会」へ反映されるという論理です。ところがインド社会は、宗教、民族・文化、言語の多様性から「ひとつのインド」として定義が困難で、無数の解と価値観が同時に存在します。即ち「個人善」の反映先である「社会」の複雑・多様性が、変化や革新を阻害しているのです。一方で、真逆の性格とも思えるインド人の「発想力」と日本人の「実行力」がビジネス・イノベーションを引起こす可能性は大いにあります。日本の先進技術や経済力が、インドの変革と成長の為の突破力、求心力になると確信しております。

インドと日本は極めて補完的関係があり、政治・経済・安全保障等の観点から今後パートナーシップ関係が深化することは間違いありません。グローバル化の第1歩は、相手国の歴史・文化を知り理解することです。インドは、過剰な多様性のため短期的な社会変化は起きにくいと考えられ、長期的、且つ忍耐強く取り組んでいくことを、本年も目標に掲げたいと思います。